

石川達三

骨肉の倫理

石川達三
骨肉の倫理

新潮社
版



骨肉の倫理

石川達三作品集第十四卷

昭和四十八年七月二十五日 発行
昭和五十一年十月三十日 四刷

定価 九〇〇円

著者 石川達三

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(〇三)六五二二

編集部(〇三)六五四三

振替東京四一八〇八番

印刷 大日本印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

装画 下田義寛

© by Tatsuzo Ishikawa 1973 Tokyo

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛剣送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

夜の鶴

骨肉の倫理

頭の中の歪み

解題

久保田正文

385 247 105 5

骨肉の倫理

夜
の
鶴

I

先日は失敬しました。恐らく君にとってはあまり愉快でない、居心地のわるい二時間だったろうと思います。どうか気を悪くしないで貰いたい。私自身も若い頃に一度は経験して知っていることであるのだから、君を嫌な気持ちにさせないように、せい一杯に碎けた態度でお会いしようと考えて居たのですが、やはりあんな風に、根掘り葉掘り、君の戸籍しらべみたいな質問をしないでは居られなかった。已むを得ない当然の手續だったと思ってもらいたいです。君は最後までよく我慢して、私の無礼な質問に答えてくれたと思います。お別れして帰る車のなかで、私は君から受けた印象の後味をかみしめて居たのですが、君の経歴とか職業とか血統とかいうこととは別に、君の人柄のなかにある誠実なもの、謙虚なものが感じられて、私は嬉しかった。

実を言うとおの日、君に会いに行くときの私の気持は、かなり意地わるなものだったことを、私は知っています。少なくとも君は、私の手から最愛の娘を奪い取ろうとす

る、敵だった。たとい君がどれほど深く滋子を愛して居ようとも、またその愛情によって滋子にどんな幸福な生涯をあたえてくれようとも、親の手から娘を奪い去るという事実に於て、君は私の敵だった。

これは運命というよりほかはない。古来、すべての娘たちは、成長すると共に父をはなれて、愛する者と二人きりの生活にはいつて行つた。彼等の幸福な結婚のかけに、絶えざる父の歎きがある。人類の歴史を、もしも愛情と結婚との歴史であると云う見方をするのならば、それは同時に、置き去りにされた父親の、何百世代にわたる歎きの歴史でもある。

けれどもこの歎きは、抵抗する術もない、力弱いものであるのです。釈迦は生老病死という四つの苦惱によつて人間の運命を悟つたけれども、世代の交替という歎きは、老いよりも病よりも深いものであると私は思う。病には抗う術もある。老いの来るのを防いでいくらかでも先へ延ばす方法もある。けれども世代の交替はどうにもならない。この娘は父が丹精して育て上げたのです。その美しい成長にどれほど大きな願いをこめて来たかわからない。ところが成長ということは同時に、別れ去ることであつたのです。解り切つただけけれども、この矛盾には耐え難い思いがします。

従って私の気持のなかには、別れの時を先に延ばしたい感情があった。今もあります。いつまで続くものでもない、一寸のばしの、優柔不断な気持であることは、自分で知って居ます。知って居りながら、せめてもう一年か半年か、娘といっしょに暮して居たい気がする。同時にまた、どうせ行ってしまうものならば、早く行ってほしい気持もある。

娘の縁談というものは辛いものです。無心にピアノを弾いて居るうしろ姿を見ながら、いつまでこうして居られるのだろうかと思ひ、静かに編物などして居るのを見ると、心のなかでは誰かを待って居るのではないかと疑ひ、父親はいつもはらはらして居るのです。新しい洋服を着ても、髪をきれいに結いあげても、あの子のすることと為すことすべてが、私の家を出て行くための準備のように思われる。

そういう被害妄想わいさくそうそうみたいな思いをして居るところへ、天野吉信という青年が現われた。来るべきものが来たというほかはない。私も妻も覚悟はしていたのですが、覚悟ということと未練ということとは別のものであるらしい。私の気持は二つに分裂していました。君が滋子にとって最も望ましい良人おつとであってくれればいいという願いと、もう一つは、君がまるで良人としての資格に欠けた

青年であってくれればいいという気持と。……後者ならば私は断乎だんことして反対することが出来る。自信をもって拒絶することが出来る。しかし前者である場合には、私はあきらめなくてはならない。

不思議なことには、私の妻はかなり私とは違った気持をもっているらしいのです。同じ親でありながら私と幹子とは感じ方がまるで違っているのです。彼女は娘が結婚するというのに、何かしら無条件に喜びを感じているらしい。滋子のために洋服だの装身具だのを選び、買ひととのえ、近い将来のために準備する、その具体的な行為に新鮮な幸福を感じているのです。そして私には、娘のために具体的な準備をしてやるような事は一つも無い。私は手持ち無沙汰で、二人の女から置き去りにされて、いつまでも決心がきまらなくて、ちっとも嬉しくないばかりでなく、何だか憂鬱ゆううつでたまらない。妻が滋子のための買物をたのしんだり、買物の相談をしたりしている様子を見ると、悪口を言ってやりたくない。幹子にとつては、娘の良人になる人がどんな男であろうとも、兎にかく娘が結婚するということは、それ丈だけでもう充分に幸福なのではないかという気がする。それで私は腹を立てる。馬鹿々々しく思われてならない。

ところが幹子は、まだ十六にしかならない男の子に關

しては、将来彼が迎えるであろう妻のことを、重大な関心をもつて考えているのです。お母さんがちゃんと見て選んでやるだとか、色の黒い女は嫌だとか、背の低い女は、やめなさいだとか、今から心配する必要もないことまでくどくどとおしゃべりをして居る。私はまた逆に、息子の嫁のことなどはちっとも心配しなくてもいいと思うのです。息子は勝手に自分の好きな女を探して来るだろう。よほど変な娘でない限り、少々どっちだって構わない。息子にまかせて置けばいいと考えている。

こういう喰い違いは私たちの嫉妬しとかも知れません。幹子は息子の嫁になるべき女に嫉妬を感じ、私は滋子の良人になるべき青年に嫉妬するのだとも言えるでしょう。幹子は君に対してすこしも嫉妬を感じないらしい。君を敵として感じてゐるのは私だけです。そういう本能的な嫉妬がつまらない感情であることは解つて居るが、無用な感情であるとも言えない。私はそういう嫉妬の眼をもつて、娘に縁談のあつた相手を仔細に観察し、研究し、あら探しをやり、意地のわるい試験官のようにそれとなく試験をし、点をつけ、そしてなるべくなら相手を落第させてしまおうとする。そういうやり方で今日まで、五人も六人もの青年を落第させて来たのです。

そういう意地わるなやり方が、一方では親としての大

義名分でもあつたのです。つまり、娘のために最もふさわしい良人を選んでやるのが父親の義務であるということ。従つてそれは私のためではなくて滋子のためであるということ。そのためには私は冷静な意地わるな試験官でなくてはならないということ。

これは一種のエゴイズムであることは間違ひありません。すべて自分の娘だけの為を考えているのであつて、相手の青年などはどうでもいいのです。その青年にすこしでも資格に欠けていると思われるところがあれば、容赦なく拒絶してしまうことが出来る。拒絶された青年がそのために絶望的にならうが自信を失おうが、こつちの知つたことではない。そういう手前勝手な考え方です。

しかしそんな風なエゴイズムも、結婚に伴う当然な行為であるかも知れない。結婚は、何千何万の異性のなかからお互いに一人だけを選ぶのです。選ばれなかつた人たちに同情する余地はない。この場合、ヒュマニズムなどという考え方は問題になりません。エゴイズムによる選択を終つてから後に、かすかなヒュマニズムが有るという程度のものでしょう。君にしても、いま、どれほど私の歎きを聞かされたところで、滋子との結婚をあきらめる気はないでしょう。君は私の手から娘を奪ひ、勝利の歌をうたい、私が淋しいさび思いをしているとき、君は新

婚の喜びにひたつていて、私を顧みようともしない、そういうエゴイズムを実行しようとして居るのです。その意味から言っても君は私の敵にちがいない。

このあいだの君と二人の会談は、謂わば敵と敵との対談であつた。ちかごろ流行の言葉で言えば冷戦でしょう。私は娘を奪られまいと防禦する立場。君は巧みに私の眼をくらまして滋子を瞞し奪うという策略……。したがって君の心のなかにも複雑なものがあつたに違いない。私を怒らせないように、私に信用されるように、立派な

青年だと見られるように、しかし、あまりに温厚で却つて意気地なしだと思われたりしないように、一挙一動に心を配つて、箸のあげおろしにも注意していたに違いない。そういう身のこなしの堅さが私にはちゃんと解つた。解つたけれども、私は悪くは解釈しませんでした。堅くなっているのはそれだけ君がまじめな証拠だと思ひました。私をたぶらかす策略というのは言い過ぎです。

そして私自身は、一種のジレンマに陥つていたと云わなければならぬでしょう。君が滋子にとって適当か不適当か、それを私は探り知らねばならない。もし不適当であるならば、この敵は大した敵ではない。もし適当な青年と思われるならば、私にとっては抗う術もない強敵です。そして、縁談をきめてしまう以前には、私の方に

一切の選択権があり拒否権があるので、私は何とも言えるけれども、二人が結婚してしまえば、それからあとは私の方には何の權威もなくなる。私は君に妥協を申し込み、君の機嫌をとり、滋子が君の氣に入るように、その事だけに氣を配らなくてはならなくなる。

したがって、あの夜は娘の父として、存分に君に質問したり揚げ足をとったり君を試験したりすることが出来る立場ではあつたが、後々のことを思うと、変にみぞおちのあたりに冷たいものを感じるのでした。

君の戸籍しらべみたいな質問や、思想調査みたいな無礼な質問をたくさんしたけれども、必ずしも私に悪意があつたという訳でもないのです。何か君の身辺から欠点をさがし出して、縁談をおことわりしようという程の考えではなかつた。そういう意地わるな氣持がまるで無いわけではなかつたが、一方ではまた、君が信頼できる青年である幾つかの証拠をさがし出して、早く安心したい氣持もあつたのです。本當を言えば、どれだけの立派な証拠を示されても私は安心など出来はしない。もし安心できる親が居たとすれば、それは怠惰と思ひます。安心はできないけれども、とにかく私が自分をあきらめさせるための口実がほしかったのだと言ってもいいでしょう。こんな文句を君にむかつて書いているのは、父親の愚

痴です。決心がつかぬままに、安心も出来ないままに、仕方なしに諦めようとする。みっともない愚痴です。こういう愚痴を許していただきたい。私はいまさらながら、女というものの惘れさに胸が痛み、女の世界の狭さに腹を立てるのです。年頃になったからと言って、何も嫁に行かなくてはならぬとは限らんだろう、と言ってやりたい。ところが世界中のあらゆる女が、二十三、四にもなると、まるで流行病にかかったように、一斉に気持が怪しくなり、仕事も勉強も手につかなくなり、近づいて来る青年の足音や気配にばかり心を奪われて、結婚すること以外の何も考えなくなってしまう。私はそんな当りまえな事にさえも腹が立って、滋子に意地わるを言ってみたくなる。滋子がわるいのではなくて、私が淋しいのです。これまで二十三年間、いつくしみ育てて来た私の愛情が、裏切られたような淋しい思いがする。

こんな事を書いて、君に同情を求めようなどと云うのではありません。君は君らしく、堂々と、私の手から滋子を奪って行くがいい。どうか堂々とやってのけて貰いたい。私が手も足も出ないほど堂々と、勇敢に、立派に奪い去ってもらいたい。その方が私は安心する。あれだけの男なら滋子を奪られても仕方がないと思うことが出来る。つまり私を立派にあきらめさせて貰いたいのです。

あの翌日、私は滋子の気持を聞いてみました。お前は一体どうなんだ。本当の気持を言ってみろ。これからさき一生、天野君を愛して行けると思うのかね。愛情も愛情だが、冷静に考えて、性格だとか趣味だとか、相手の職業、思想、そう言ったいろいろの条件を考えてみて、うまくやって行けると思うかね。結婚ということはやはり一生に一度きりでありたい訳だし、失敗しないように始めからよく考えて置かなくてはならないのだが、……結婚してもいいと思うかい？

これもまた無理な質問です。代数の問題を解くように、さらさらと一つの答えが出せるような話ではない。これからさきの一生を愛して行けるか行けないか、そんな事が誰にわかるものか。解りもしない質問をされて、滋子は返事に窮していました。可哀相に、ジレンマに追い込まれて居たのです。一生愛して行けると言えば嘘になるし、愛して行けないと言えば結婚の条件はそろわない。私は答えるできない質問をして、娘を困らせていたので。古今東西を問わず、何百年もの昔から、すべての父親はそういう質問をして娘を困らせ、娘は答えかねて溜息をついて居たわけだ。

溜息のあとで、思いあまつたように滋子は言うのでした。

「お父さんはどう思うの？」

「お父さんじゃないよ。お前の結婚のはなしじゃないか。お前は どう思うんだ」

散々迷わせておいて、お前は どうだと言われても、早速に巧い返事が出来るはずはありません。

「だって、解らないんだもの。……お父さんがいけないと思うんだったら、わたしやめるわ」

こういう娘らしい言い方を、誤解しないようにして貰いたい。この言葉をもって、滋子が君を愛していないとか、愛情が足りないのだとか考えたら間違いです。（わたしやめるわ）という言葉は、親に対する反抗の表現です。やめる気などは毛頭ない。私が承知すれば忽ち君のところへ飛んで行く。そういう感情をじっと押えて、親の意見に従うようなことを言っているのは、親に対するあの子のいたわりです。二十幾年を大切に育てられて来た、その恩義や愛情を充分に知りつくしているので、好きな人ができたからと言って、早速には飛び出して行かない。それでは義理もわるいし、親が可哀相だと思っているのです。これは結婚にあたってすべての娘たちが経験しなければならぬジレンマ、運命的に避け得られない心の矛盾です。

そのうえ、結婚には巨大な不安がある。予想できない

ものが沢山ある。幸福になるかも知れないが、ひどい不幸になるかも知れない。そういう怖さがある。そこへ行くとも両親の家庭には、さし当って何の不安もないし怖いものも無い。その安全な家をはなれて不安な結婚に飛びこんでゆくためには、よほどの決心がなくては済まない。逡巡する気持がおこるのは当然です。

しかし、恐らく滋子はもう決心がついているのだし、もう。私はそう思う。彼女の逡巡はむしろ私に対するいたわりの気持の方が多いのではないかと思うのです。滋子はそういう娘です。やさしくて、思いやりがあつて、自己を主張することの少ない娘です。主張するような自己をもたないのではない。なかなか芯のしつかりしたところも有る。学生時代にはともかくもクラスの幹事とか委員長とかいう仕事をやって来た娘ですから、それ丈のものを持つて居るのですが、家庭ではそういうところをちっとも見せない。自己を主張するのを感じないらしい。それだけ深く親たちを信頼しているのだらうと思います。（お父さんがいけないと思うんだったら、わたしやめるわ）という言い方のなかに、抵抗と信頼とが同時に含まれているのです。

そういう会話のあと、まだ結論のつかないままに、夕方になって、滋子は台所の仕事を手伝つて居ました。家

事が好きで、気が向けば洒落た洋菓子焼いてくれたり、鮮やかな色どりをした野菜サラダをこしらえてくれたりする娘ですから、夕方の手伝いなどは珍しいことでも何でもありません。私が毎夜十時ちかくなつて、勉強をすませてから一杯の晩酌をやろうとすると、季節のものを巧くとり合せて、ちよつとした酒の肴をととのえてくれたりする。そういう娘です。

夕飯を待つまでの暇な時間に、夕刊を読もうと思いつき、私は庭下駄をはいて裏木戸まで廻って行きました。その戻りみち、台所の外を通りかかつて、何気なくちらと窓格子のなかを見ると、そこに滋子の顔があつた。魚を焼くけむりが白くたちのぼるなかで、うつむき加減に、じつと焼けるのを待っている、その横顔が、はつとおどろくほど蒼白くやつれて見えました。心がうつろになつて居たのか、それとも胸が一杯になつて居たのか、彼女自身では気のついていない深い憂いが、その顔にあふれていた。

そういう自分でも気がついていないふかい憂いをたたえた姿をして彼女が何を求めていたのか、父に解らない筈はない。私はしばらくのあいだ部屋にはいらずに、庭の黄昏のなかにたたずんでいました。自分のからだだが夕闇のなかに融けこんで消えて行くような気持だった。私

はそのとき、自分がどんなに悪いことをして居たかを知つたのでした。父という特権的な名を借りて、親という立場を利用して、あの子の深い深い願いを押えてしまおうとして居たのではないだろうか。私たち両親は娘のために良縁をもとめ、理想的な結婚をさせてやりたいと考えて居たけれども、良縁とは一体何だろうか。私はいろいろな外部的な条件を検討して、良縁であるかないかと判断しようとする。その為に君と食事をともにして、戸籍しらべみたいなの質問もせずには居られなかった。

しかし滋子はもつと直感的に、そしてもつと情緒的に、強い愛情をもとめて居る。外部的条件のそろつた青年が必ずしも深い愛情をもつてくれるかどうかは解らない。条件がそろふことと、条件はそろわないけれども深い愛情をもっていることと、どちらが理想の相手であるか、それは私にも判断がつかない。ところが私には、君と滋子とのあいだの心のつながりがどの程度のものであるか、それは解らない。従つて外部的な条件だけで判断するより仕方がない。親が為し得ることの限界がそこにあつたのです。それを私は、自分の限界を忘れて、親である自分を過信していたのではないかという疑いを感じたのでした。

私はもししたら、娘の望みをおさえつけ、娘の生き

て行く道の邪魔ものになって居たのかも知れません。或る時期が来たら父は娘に譲らなくてはならない。今はその時期がやって来たようです。

その夜、私は家内に相談をもちかけてみました。

「話をきめて宜いかね。お前は思う？」

幹子はしばらく考えてから、

「あなたは思うんですの？」と訊き返して来ました。「いくら考えても決心がつかないんだ。大丈夫だという判定はくだせないが、駄目だときめるだけの根拠もな
さ」

「あたり前じゃありませんか」と母親は、案外割り切った返事をしたのでした。「絶対大丈夫なんていう縁談はどこにも有りはしませんよ。私だって、安心できるだけの根拠があつてあなたの所へ来たわけじゃありませんわ行き当りばつたりというのも困るでしょうけれど、いくら考えたつて本当は、先の事なんか解りやしないんですからね。その点から言うはずいぶん危ないことですね。でも、何だかよく解らないけれど、信じられる人ということが、結局一番大きな条件になるんじゃないでしょうか。間違ひがあつても踏きがあつても、それを取り戻して、永い生涯をやつて行くのには、信じられるという事が第一でしょう」

それはその通りに違ひない。信じ得るからこそ生涯の協力ができるのです。そして幹子は天野吉信君を信じ得るような気がすると言います。これは女性の直感かも知れない。そして私もまたその直感を信じてもいいような気がするのです。

けれども、信じられるということは愛情とは別なことであるらしい。愛しているけれども信じられないということもあるし、信じているけれども愛せないということもある。愛情が信頼をうみ、信頼が愛情をうむというのは普通だけれども、その二つが喰いちがつて一致しない場合もある。そう考えると、結婚の幸福を支える力は、信頼が第一であるのか愛情が第一であるのか、それさえも解らなくなってくる。

私たちも若い時代に、そういう疑問につき当り、疑問を解決し得ないままに結婚し、それから後もたびたびそういう疑問を感じながら、今日まで何等の結論をも得ないで、ただ経験による惻巧さと生活の便宜と、その他のいろいろな条件とに支えられて共同の家庭を維持して来たのでした。恐らくこの問題は結婚という制度がはじまつて以来、一度も結論が出されたことのない問題だろうと思います。そして今はまた、君も滋子も、二人とも同じ問題について思い悩んでいるに違ひない。まるでスフ